

らずして、機能上の變化のみが、經驗せられる場合も、考へられるであらう、殊に思考作用の上に、表現する各種の意識性、乃至は、傾向が、これを示すであらう。

私共が、若し、感官的知覺の場合に就て、これを省察するならば、全體から、その中の分節的部分、乃至は、部分間の關係を、認知する場合に、思ひ當るであらう、この場合に於て、不認知から、認知へと、推移するには、必ずしも、現象的變化を必要としないであらう、變化せらるゝものは、即ち機能的様式であることは言ふまでもない、例へば或和弦を聞いて、その中に、徐々に、或音を聽き出すが如き場合、その和弦は、最初から、終りまで、變化してゐないが如きはそれである。かういつても、直ちに機能によつて、割合や、又は、複合が、生産されるといふ様に、早合點をしてはいけな、本書に於て、既に指摘しておいた様に、古くから、所謂、生産説をとつて來た人々は、少くないが、例へば、グラーツ派を始めとして、ゲ・エ・ミュラー等の思想を辿られたい(シユトウンプは、正に、この正反對の潮流に立つものであつて、決して、機能が、現象に、變化を與へるものと考へてゐないから、總括的機能の相關者として、これを示すに、全體又は總體(Inbegriff)を以つてし、この中には、例へば、エーレンフェルス以來の形態質を含み複

合を含むものと考へたのであらう。故に、概念的機能の相關者は、概念自身であるとし、判斷作用に於ては、即ち、判斷内容が、相關者であるとし、ブレンタノーのこの點に關する考察乃至は、ボルツァノ(Bernhard Bolzano)の命題其自體(Satz an sich)の思想を辿り、これを示すに、事態(又は『ことがら』Sachverhalt)を以つてし、更に進んでは、情緒的機能の相關者として、價値の考察を示したのである。

然らば、如上の機能、現象に對する第三者としての所謂全體(Inbegriff)又は、複合(Gebilde)の意義、乃至、これが、機能、現象に對する關係はどうであらうか、シユトウンプの考察に依れば、現象と機能とは、論理的に無關係になり得るが、複合は、機能の内容として論理的依存關係に、立つものと考へ、こゝに、これを現象、及び機能の中間に於ける概念として、考察するに留つたのである、蓋し、これ、當時のシユトウンプとして、こゝから、更に、一展開を志し、以つて新機軸を示すことが、困難であつたのであつて、その出發點を考へ直さなければ、彼れの所謂全體の下に、機能、現象の兩方面を包括する視點をとることは不可能に終るであらう、これ結局、彼に於ては、所謂全體若くは、複合等の概念が、その新しい生命を見出し得ない所以であるのみならず、



これ等の概念が、その現象との關係に於て、曖昧なる意味を残し、シュトゥンプを眞に理解せんとする學徒が、却つて、これに妨害せられて、迂路を彷徨するに至るのも、この點に依る部分も少くないといへるであらう。

以上述べた様に、シュトゥンプに於ては、現象概念は、認識論的意味を持たず、實在乃至意識に對する關係を含まず、感覺内容乃至記憶像等に對する省略語であるが、この現象間の區別すら、本源的に、機能に存するものではなくて、現象、それ自身の區別と考へるのであるから、これ等の現象が、その性質と共に、吾人に與へられて、客觀的かつ獨特なる構造として、出現するものを、叙述し、これを認識することは、心理學の研究すべき問題でないのみならず、自然科学の研究對象でもない、否、自然科学にも非ず、心理學にも非ざる所謂中性科學としての現象學の取扱ふべき問題となるのである、かく現象の構造法則を叙述し研究しようとするシュトゥンプの所謂現象學は、當然、經驗心理學的現象學とも區別せられ、經驗的所與の括弧づけから、それ以上に出で、所謂現象的領域に於て、純粹本質直觀を志さうとするところのフツセルの考想とも明確に區別されなければならぬであらう。

然らば、機能を取扱ふものは如何なる學であらうか、自然科学が、これに干與しないのは勿論である、蓋し、自然科学は、現象乃至は現象の複合をも、問題としなが、只、現象から推定せられ空間的、時間的關係に配列せられた法則的變化の支持者を、問題とするからである。却つて、機能が、與へらるゝまゝに、問題とされるのは、所謂精神科學に於てであるが、併し與へらるゝまゝの機能は、その對象の資料を供するにすぎないのである、かくて、思考對象として高められた機能の全體が、こゝに精神科學の對象となるともいへよう、彼が精神科學として考へるものは、國家及社會科學、言語學、宗教學、藝術學乃至、心理學等であつて、就中、心理學をもつて簡單心的機能の學とし、前に記したところの他の科學をもつて、複雑心的機能の學と見做してゐるのである。かう考察してくると、シュトゥンプに於ては、心的機能が、生物的、生理的に考へられながら、他面に於ては、これを取扱ふ科學が精神科學の系列中に於て取扱はれ、而も精神科學に對して附隨的意義しか、持ち得ない點も著しく目立つのである。さて、私は、以上、シュトゥンプの心的機能を、中心として、論じたのであるが、この思想には、その師、布伦タノの志向的内容の考想に比して、著しい展開



の跡が見られるであらう、ブレンタノーに於ては、所謂スコラ哲學の傳統から、志向的對象の考察を攝取して、凡ての心的作用の特質として、志向的體驗を認め、而も表象を根基として、その考察を進め、寧ろ、こゝに論理的轉向を持ちながら、これを無視して、機能に内容を包括せしめて、考へたのであるが、シュトゥンプは、これを、寧ろ峻別することに依つて、自己の出發點を求めようとしたのである。

フツセルに於ては、凡ての心的現象に、志向性を求めることは、敢て試みられなかつたのであるが、而も論理的轉向に立つて、この道を進まうとしてゐる點は、ブレンタノーの考察にも程近いであらう。

だから、これ等の思想の中には、相互に比較し得ざる契機を多分に持つのであるが、これを常識的に示すことを許されるならば、ブレンタノーに於ける物的現象に相應するものは、フツセルに於ては現象された客體又は事物 (Die erscheinende Objekt od. Dinge) であるが、これ等にも程近い意味を持つものが、シュトゥンプに於ては、現象であらう、勿論、この場合、前二者に於ては、志向體驗が前面に立ち、後者に於ては、かゝる體驗と比較的獨立的な意義を持つものである。

これと、同様に、ブレンタノーに於ける機能、又は、心的現象は、フツセルにあつては、事物現象 (Dingerscheinungen) とも見られ、體驗とも見られようが、これにも相近きものが、即ちシュトゥンプに於ける機能ともいへよう。

然し、如上の對應關係は、只、單なる常識的考察であつて、その學說の全組織から、これを眺めるときには、著しい對立として眼立つであらう、この點に於ては、又、パウ・ナトルプ (Paul Natorp) に於ける自我 (Ich) 及び自我性 (Ichheit) 間の關係としての意識性の概念 (Bewußtheit) に就ても同様のことがいはれ、これと、別個の意味に於て、シュトゥンプとリップス (Th. Lipps) との對立も考へ得られよう、即ちリップスは、自我に於ては、自我體驗を根柢として、そこから、その組織が編み出されてゐるが、シュトゥンプに於ては、これと全く反對の意味が考へられてゐるからである。

私はシュトゥンプの考察を所謂著しく心理學的考察と論理學的考察とを混同しようとした學者達と、主として對立的に、考へようとしたが、これは然し、彼の考察を眞に理解する道ではないかもしれぬ。

蓋し、當時、ブレンタノーは、恰も、新カント派哲學が十九世紀の自然科学の批評



から出發した様に、自然科學的心理學の基本概念の批評から出發して、アリストテレス及びトマス・フオン・アクイノ (Thomas Von Aquino 1227—1274) を通じて、内在的對象性乃至は、對象の志向的内在の思想をとり入れ、沒價値的作用としての表象作用と、價値關係を含む作用としての判斷、情意作用とを高唱し、これらの作用に對して、對象を内在的と考察したのであるが、こゝにボルツァノ (Bolzano 1781—1848) に於ける表象其自體 (Vorstellung an Sich) 眞理其自體 (Wahrheiten an sich) 命題其自體 (Satz an sich) として、意識から超越的と考へられた意味其物の世界と結合する因由をもち、或は一面には、マイノングに<sup>(二一五)</sup>表現せられて、これを作用と分離して、内容の性質關係を研究し、例へば、見る作用、聽く作用、嗅ぐ作用、等と分離して、色、音、香の性質關係を、恰も、空間に對して、幾何學が成立するが様に、特定の幾何學の如く取扱はれ、實在の研究に非ずして、所謂意味の研究として、事物の研究に非ずして、所謂屬性の研究として、その目的を客觀に置かず、却つて、客觀的なるものに置き、客觀は存在するものとして考へられ、客觀的なるものは成立するものとして、或は、知的に把握せられるもの、考へられるもの、實在的なるもののみならず、可能なるもの、それ自身矛盾を含む

んで、不可能と考へられるものをも研究の對象として考察せられ、こゝに、所謂グラーツ學派の中心思想としての對象論と化し、或は他面には、ポーランドの研究家カシミル・トワルドウスキ (Kasimir Twardowski (1866—)) の分析的研究となり、内容を内在的とし、對象を超越的として、峻別されたのであるが、これ等の諸潮流が輻輳し、結晶化せられ、フツセルに表現せられ、凡てのアプリオリに立つ立場を除去し、純粹意識から現實的存在としての對象と、自己の個性とを、括弧づける方法に依つて、純粹直觀の世界の記述が志され、こゝに、純粹論理學的問題への示唆としての現象學に至つたのであるが、これらの思想の全面には、先にも指摘した様に、論理的問題乃至は、それへの示唆としての方向が廣がり、これ等の潮流の中に立つて獨りシュトンプのみが幾分、科學的心理學者としての視點に立つて、これが展開を志さうとしながら、而も、中途にして不徹底未完成の領域として留り、遂に來るべき心理學への示唆としての斷片を示すにすぎなかつたのである。

故に今、私はシュトンプの機能心理學、若くは、作用心理學が持つと思はれる弱點を、先づ指摘することに努め、更に、これが與へた最近代心理學への暗示と示唆とに



論及しようと思ふ。

第一、シュトゥンプ機能心理學の弱點

(一)シュトゥンプの所謂機能と現象との區分は、一面から見ると、心理學的に考へられ論理的問題を避けようとせられながら、他面に於ては、論理的抽象的への契機をもつといふ點である、これ、彼れが所謂機能を考へて、それから、徐々に、現象を峻別しようとする方向をとつたことにも依るであらう、蓋し、この考想は心理學的に、最も興味のある點であつて、具體的現實的な機能が考へられてゐる限り、有意義であるが、一步、そこを踏み出すと、論理的抽象的の問題への轉化が見られるであらう、シュトゥンプが、自ら、その點を注意しながら、やゝもするとその方向へ向はうとすることは、彼には、兎角、素朴的經驗への洞察が、缺けてゐたためともいはれよう。

(二) 現象、機能兩者の峻別から全體又は總體 (Inbegriff) 乃至、複合の概念の處理に窮してゐることである、現象は機能と論理的に無關係なるものと、考察しながら、複合をもつて機能に論理的に依存するものと考へ、かくて機能の相關者として、こゝに、論理的世界の可能を示してゐることである。だから現象、複合、機能の三者を對立して見ると、表面、明確なる區別がある様に見えて、これを深く探ると、曖昧なる部分を残してゐるのである、表面上、明確といふのは、若し、現象を取扱ふものを現象學とし、複合の問題は論理學の問題とし、機能を精神科學の問題とすると、やゝこれ等の間に、限界が考へられることを意味するのであるが、然し、一步を進めて現象と複合との限界、區別の問題に立ち至つて見ると、遂に迷路の中を彷徨せざるを得なくなるであらう。

(三) 心理學が、結局、簡單心的機能の學として、精神科學の一分科を構成するに過ぎないことは、心理學を消極的意義に解釋したものであることは勿論である。

(四) 不徹底なる基礎の上に築かれたる科學の分類が、やゝもすると、非難の對象となるのも道理である。

その他、シュトゥンプが不徹底である根基は、既に、その出發點にあるのであるが、而も、この大膽なる試みは、却つて、新しい立場に對して、著しい暗示を投げたことは勿論である。



## 第二、シユトウンプの機能心理學の貢獻

(一) 傳統的内容心理學に對する極端なる對立を示し、これが偏頗なる視點を去つて、機能作用の問題を心理學上の中心問題として、展開せしめる機運を導き出したことである。勿論、この種の方向に立つ潮流は少くなかつたが、それらにも増して、著しく影響を及ぼした點である。

(二) 彼は、機能を生理的生物的類推によつて、考へてゐるから、只、單に、直接、意識のみから、心理學を建てようとするの愚を反覆しようとしてゐない、即ち、彼は、機能心理學をもつて、精神を機能と素質とから成る全體として、解釋する見解と調和するものと考へ、こゝに深き洞察を示してゐる。

(三) 機能がその相關者として複合を持つといふ考想は、他面から見ると、これを生産するものでなくて、直接に把握することを暗示するものであるが、この思想がグライツ派への著しい對立として、その及ぶ所は大きい。

(四) 彼が、その著書の各處に、斷片的に暗示した全體と部分との考想は、未發達なる論理的性分を、著しく、包含するものであつたが、徐々に、これが開拓を暗示し

た場合は少くない。

(五) 彼の機能が從來、やゝもすると考へられた様に、單なる知的機能ではなくて、知的情的機能を總括するものであることは、又、注意に價する、こゝから、即ち、有機體の全機能の考想も誘導せられ得よう。

(六) 彼に表現せられた現實性に就ての考想は、未だ不明瞭なる概念であつたが、後に展開される契機を持つ様である。

(七) シユトウンプは體驗を論ずるが、これは、直接に自明なものとして經驗することにはすぎないから、彼の心理學が、從來、やゝもすると行はれた様な、自我心理學でない點である、むしろ、その問題と別個に機能を對象として研究する道を示したのである。

(八) 彼の機能心理學に於ては、機能は生理的生物的類推から、考へられ、一步、轉ずれば、目的論的考想へ墮すべき示唆は持つてはゐるが、然し、彼に於ては、終始、これは、さけられてゐる、米國流機能心理學に於ては、こゝを出發點として、目的的考想を中心思想として持つに至つてゐることは、いふをまたない。



以上述べた點はシュトゥンプの心理學が、與へた效果の主なる部分に就てであるが、最近心理學が多かれ少かれ、機能的心理學の色彩をもち、今や、機能乃至作用が心理學の中心問題として論ぜられようとするに至り、シュトゥンプ心理學の教ゆる所は少くないといへようと思ふ。

## 参考書目

- (一) Carl Stumpf, Erscheinungen und Psychische Funktionen S. 5—6. 1906  
 (二) " " S. 4  
 (三) " " S. 4—5  
 (四) " " S. 6  
 (五) " " S. 9  
 (六) " " S. 11,  
 (七) " " S. 32—33  
 (八) " Zur Einteilung der Wissenschaften S. 16. 1606  
 (九) " " S. 21. 1906  
 (一〇) Bolzano, Wissenschaftslehre 1837

- (一一) A. Meinong: Abhandlungen zur Psychologie 1914  
 (一二) " : Abhandlungen zur Erkenntnistheorie und Gegenstandstheorie 1913  
 (一三) " : Untersuchungen zur Gegenstandstheorie und Psychologie 1904  
 (一四) " Über Annahmen, 1910  
 (一五) Ernst, Mally. Gegenstandstheoretische Grundlagen der Logik und Logistik 1912  
 (一六) Kasimir Twardowski, Zur Lehre vom Inhalt und Gegenstand der Vorstellungen 1894  
 (一七) Edmund Husserl, Ideen zu einer reinen Phänomenologie u. Phänomenal Ph. Jahrbuch der Philosophie I. 1922  
 (一八) Carl Stumpf, Die attribute der Gesichtsempfindungen 1917  
 (一九) Carl Stumpf, Psychologie und Erkenntnistheorie 1891  
 (二〇) " Tonpsychologie 1883—1890  
 (二一) Th. Lipps: Leitfaden der Psychologie 1908—1909)  
 (二二) " Einheiten und Relationen 1902  
 (二三) " Grundtatsachen des Seelenlebens 1912  
 (二四) P. Natorp, Allgemeine Psychologie 1912



## 第十二講 形態心理學の發生期の研究と その方向

すでに千八百八拾六年マツハの「感覺の分析」が出で、千八百九拾年、エーレンフェルスは形態質の考察をあらはし、同年、現在百有余卷に達する心理學雜誌 (Zeitschrift f. Psychologie) が、エビングハウスその他の學者に依つて、創刊せられ、その翌年にはフツセルの算術の哲學が見え、次いで、マイノングの勞作が現はれ、千八百九十四年には、デイルタイは、敘述的分解的心理學に就ての理念を示し、漸く、各方面に、形態に對する暗示的思想は芽生へたのではあるが、然し千八百八拾六年から千九百一十二年頃の間には、謎を含む問題として、僅かに少數の學者にのみ注意せられ、只一つの思想として存したにすぎなかつたのである。蓋し、この間に提出された多くの勞作は、主として傳統的考察に従つて、新問題を解釋することに向けられ、今から

見ると、當時、如何にも多數の學者が問題視したやうでもあるが、然し、これを、一般心理學的問題から見ると、かゝる問題を取扱ふことすら、變態的であつたやうである。然るに、從來、考察した多くの學者の眞意義が多少でも、認められ、問題とされる様になつたのは、實に伯林大學の學者達によつて、明瞭なる具體的問題として、提出されるに至つた事に始るのである。

千九百十一年から同十二年の間に、今から見ると、名研究とも稱せらるべき運動視に關する實驗的研究<sup>(一)</sup>と、自然民族の思考に就てといふ<sup>(二)</sup>二つの論文がマックス・ウエルトハイマー教授によつて提出せられたのである。

元來、マックス・ウエルトハイマーはその態度、その風采、その眼光、總じて豫言者を想起せしめる様な、誠に學者らしい人であるが、而も、それは講座的學者ではなく、眼を前にして進まうとするところの研究者としての學者であつて、講義でも、著書でも、一句の無駄をも含まない所に、彼の特徴がある。従つて、若し、この人に直接、接しない、著書だけ見ると、或は、粕を味ふが如く、或は、數學の公式を教へらるゝが如く感ずる人も、少くなからうが、言々、句々含蓄多き彼の考想と、その背景とを辿ると、併



し更に、彼に對する考へ方にも、自ら變化が起ることも又著しからうと思ふ。  
しかも、特に、彼の思想が意味を持ち得るのは、實に、これ、現代心理學の門戸としてであつて、最近代思想を辿らうとすれば、一度は必ず彼の洗禮を経る要がある點である。

彼は、只に、心理學者だけに留らない、論理學の問題や、數學と論理學との限界問題や、乃至は哲學上の諸問題は彼の終生の事業として志され、既に着々新しい開拓を試みてゐるのであるが、心理學者として見ると、こゝに彼の思想の強味があると共に、又同時に少からぬ危険の絶壁に臨んでゐるのである、とはいへ、彼の勞作から、これを見ると、これ等の諸問題を混同するほど、頭腦の明敏さを失つてゐるとも思はない。

私は、今、本書の性質上、哲學乃至論理學の問題の記述をすることは避けなければならぬ筈であるから、こゝではマックス・ウエルトハイマーの處女作の一つとも考へられる運動視現象の研究を藉りて、彼れの考へ方の跡を辿り、その輪廓を描寫して、次に來るべき諸問題への解明の一助ともしようと思ふ。

さて、運動視とふ現象は、古くから取扱はれてゐたものであつて、決して、新しい問題ではない、然らば如何なる現象であらうか、

今、例へば第一圖の様な二つの線を一定の間隔時間を置いて繼起的に短い露出時間、露出すると、實際は静止してゐるべき筈のものが現實的には動くと感じられることがある、これ即ち一種の運動視であつて、



兒童玩具としてのストロボスコープ (Stroboscope) は、自ら廻轉する多くの窓に、静止する物體を置いて、同様なる現象を生起せしめるものである。

私は、二、三年前、三つの光點の繼起的露出によつて起る運動視を研究したが、一定の間隔時間、露出時間の場合に限つて、こゝに出現する形に著しい運動が、具體的に感ぜられることを確め得た、これと同様の現象が音點の繼起的露出によつても生起するものであつて、例へば二つの同一強度の音を音響籠上の二點に繼的に露出し、一定の間隔時間、露出時間の場合に於ける現象を如實に觀察すると、生々とし



た一つの音點の飛躍が生起する、これ等の現象は各種の條件變化によつて研究せらるゝと興味少からざる問題を包含する領域であつて、この音現象を音空間知覺に關係さして、私は數年來研究してゐるものである<sup>(四)</sup>。皮膚知覺に關しても、やはり同様の現象が經驗せられるが、然しこゝでは特に運動視の場合に關係するのであつて、これに就ては、古く、エックスナー (Exner) が先づ二光點の繼起的露出の方法によつて研究し<sup>(五)</sup>、マルベ (Marbe) は靜止してゐる小ランプの繼起的露出の方法を採り<sup>(六)</sup>、シユウマン (Schumann) は瞬間露出器によつて水平、垂直の二線を靜止的圖形として前後に露出して實驗する方法に依つた<sup>(七)</sup>。これ等の諸研究と相前後して、殆んど同様な研究が續出し、殊に、精密なる量的分析を志したものは、とりわけ、アウベルト (Aubert) の研究に見ることが出来るのである<sup>(八)</sup>。

かくの如く、運動視現象は、やゝ、一般的なる實驗心理學の分野に屬する問題とならうとしたが、當時、この問題に就ての考へ方は、決して統一されてゐたとはいへない、若し、強いて優勢であつた考へ方を求めるならば、運動視現象を、知覺の簡單なる要素に分解し、かくて孤立的、恒常的簡單過程に、要素的生理過程を相關せしめて、考

へようとする態度が少くなかつたといふ點であらう。

この立場に立つて、この現象を眺めると、所詮、各種の學說が立てられる可能性が存在するのである、然らば如何なる學說の可能性があるか？

今、その主要なる點を、摘出して見よう。

第一、運動視現象は、特殊なる感覺に販せらるべきものであるとする見方である<sup>(九)</sup>。

第二、この現象を、特殊高等精神過程に基づいて生起するものと考へるもの、例へばヴント (Wundt) の如きは融合感覺に統覺作用が加はると考へたが、この外にもこれにも程近い考へ方は少くない<sup>(一〇)</sup>。

### 第三、殘像說

網膜の近隣部の興奮の漸増、漸消の關係から、それが相重り合ふために、融合して運動を感じると考へるものである<sup>(一一)</sup>。

### 第四、眼球運動說

これ、即ち、眼の運動感覺に、運動視を還元しようとするものである<sup>(一二)</sup>。

### 第五、形態質說、又は、複合質說



運動視をもつて、形態質、若くは複合質に關係するものとする考へ方である。<sup>(一三)</sup>さて、如上の諸學說の外、多數の可能性があつて、不可解の謎として残つてゐた運動視の實驗的研究を志したウエルトハイマー (Wertheimer) は、或は、シュウマン (Schumann) 氏瞬間露出器を應用し、若くはこの装置の原理に基いて、工夫された紙製簡易装置をもつて、詳細なる研究をなすに至つたのである。

このウエルトハイマーの運動視研究は、便宜上、二部に分つて見ることが出来る。即ち、一は、運動視研究であり、二は、形態視研究である。

### 第一、運動視研究

第一圖に示した様な a 及び b を、繼起的に露出して、これを見る場合、a と b との露出される間隔時間(勿論この場合、露出時間、即ち一つの刺戟が露出されてゐる時間、刺戟の性質、刺戟の強度、等の諸條件が協合するのであるが、特に、これ等の條件を除外して、一般的に考へて見ると)が長い時には、a が出現してから、b が現はれると感ぜられる、これを繼起時期と名づける、間隔時間をもつと、短縮すると、一定の間隔の時に至つて、始めて運動が感ぜられる、即ち運動には、最適時間が存するものである。

つてこの最適時間を中心として、短い前後の時間を含む時期が、運動時間である、更に、二つの刺戟間の間隔時間を短縮すると、今度は、今までの運動が停止して二つの刺戟が同時にあるといふ感を伴ふものである、この時期が即ち同時時期である。

この三つの時期は、勿論、刺戟の性質、刺戟強度、露出時間等の條件によつて、變化するものであつて、後にコルテ (Korté) <sup>(一四)</sup>によつて、條件的研究がなされ、規則的關係が指摘されたのであるが、私が他の目的のために、企てた實驗的研究に於ても、その一部が檢證せられてゐる。<sup>(一五)</sup>

一般的に、これを見ると、露出時間が短いときは、間隔時間は比較的長くても、運動時間が出現し、露出時間が長くなると、間隔時間が短い場合、運動時期が、現はれるやうになるものであつて、精密にいふと、それぞれの條件に相應じて論ぜられなければならぬのであるが、當面の説明の便宜上、間隔時間だけに限つて、大體の所を言つて見ると、第一圖に示した様な、a 及び b が、繼起的に露出され、間隔時間が約、三〇〇σ で、例へば、繼起時期であるとする、これを全く短縮して、約六〇σ にすると、運動時期出現し、尙ほ更に短縮して二〇乃至三〇σ にすると、同時時期が出現するとい



ふ關係になるであらう、マックス・ウエルトハイマーは、運動時期を中心として、如上の三時期に涉つて研究の歩を進めたのである。

今、その二、三の點に觸れて考へて見よう、

第一圖に於ける a 及び b が、一定の間隔時間、露出時間の折に、最適運動時期に該當すると a と b とが一つになつて  $a=b$  といふ印象をもつて、單一運動が感ぜられる、

第二圖の様に、a と b が、その長さを異にしてゐる場合でも、全體として  $a=b$  して少しく短くなつた一線が、運動するといふ感じを伴ふ場合がある。

表面的にこれを見ると、同一といふことが運動の原因であるかの如く見え、こゝに a と b とを融合する働き、又は、作用があつて、同一と感ぜしめることが運動視の主要なる要因であるかの様な姿を呈するが、然しさう考へることは、必ずしも、事實に適合するものであると、速斷することは出来ない、リンケ (Linke) が、運動視を研究するに當つて、採つた説明法は、如上の同一印象、若くは、同一錯覺に、よつて説明しようとしたのであるが、然し先きに述べた三つの時期を考慮に入れて見ると、必ずし

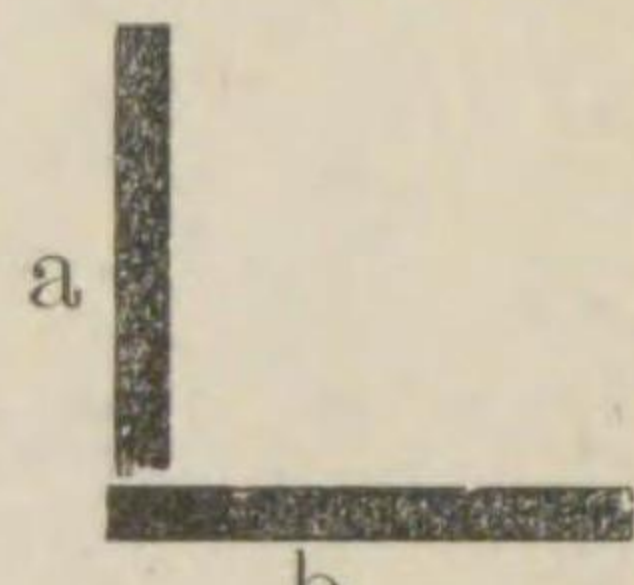
も、同一印象が、運動の原因である様に考へることは、出来ない、といふのは、間隔時間が短縮され、若しくは、それが延長せられ、同一の印象が必ずしも出現しなくとも、著しい運動が經驗せられることがあるからである、私自ら研究した場合に於ても、運動時期と繼起時期との境界に相當する部分に於て、特有の運動の經驗が出現し、而も同一といふ印象の存しないことを確め得たのである。

ウエルトハイマーは a と b とが同一といふ印象がなくとも、而も二つのものが著しい運動を呈する様な場合を特に二個部分運動 (Duale Teilbewegung) と名づけたが、この種の運動は、相互に色の異つてゐるものが、繼起的に露出される場合でも、形の相互異つてゐるものが、繼起的露出される場合でも、出現するものであつて、リンケが考へた様に、同一印象だけから、説明し盡されるものでないといへよう、蓋し、リンケの研究は運動視を見るに當つて、その一部分の現象から全部を推定しようと思つたものである。

然るに、運動視に就ては、二個部分運動の外にも所謂、單獨運動 (Singularbewegung) と稱せられる場合も觀察せられる、例へば a b 二個の繼起的露出に當つて a は靜



第三圖



止してbだけが運動する様に感ぜられ若くはこの逆の場合が起る様なものはこれに屬する。

同一印象がなくとも運動が出現すると思へるのは、上記の二個

の場合に限らない、時によるとa b二個の外に第三の静止點cを入れて觀察する場合、時によると、c點までが運動の中に加えられることも稀らしくはない。

さて、ウエルトハイマーは運動視に出現する諸現象に就て組織的研究を行つて、從來の諸説を批判し、或はこの現象に就ての末梢説を吟味し、或は、特殊感覺若くは、高等精神作用の協合の不可能を考へるに至つたのである。

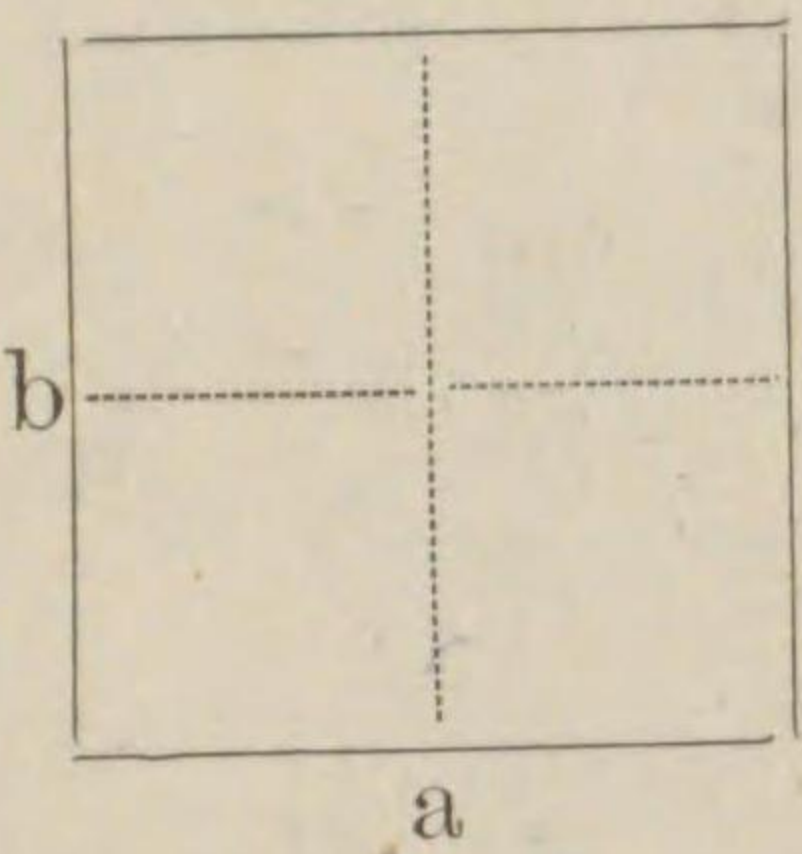
然らば、如何にして、これを吟味しようとしたであらうか、今、これを一つ一つ辿るの煩を避けたいと思ふのであるが、殊に、彼の着眼點に就て、興味があると考へられ、後の研究者に大いに利する所の少くなかつたと考へられる末梢説殊に眼球運動説の批判を中心として論じて見よう。

眼球運動説の困難は次の三つの場合において、著しく感ぜられ、結局この學説が、俗論であることが、明かにせられる。

(一) 眼の運動反應の最小時間の測定は、かなり困難であるが、從來、この種の研究  
中、エルドマン及びドツヂの研究によると、約一三〇σであるが、ウエルトハイ  
マーの研究によると、全露出時間(a)の露出時間、間隔時間、bの露出時間を、十分  
ノ一秒より短くして、實驗して見て、而も著しい運動が起り、却つて短い時間に  
最適時間の存することを明かにした、これ、眼の運動が、この現象を、規定し得ざ  
ることを示す一つの證左である。

(二) 今、被験者に、一定の形の殘像を作らしめ、この殘像を壁の上に投射し、この投  
射面の上にa及びbを繼起的に露出して、出来る限り殘像を固定せしめて、實  
驗して見ると、運動は著しく感ぜられる(第四圖參照)

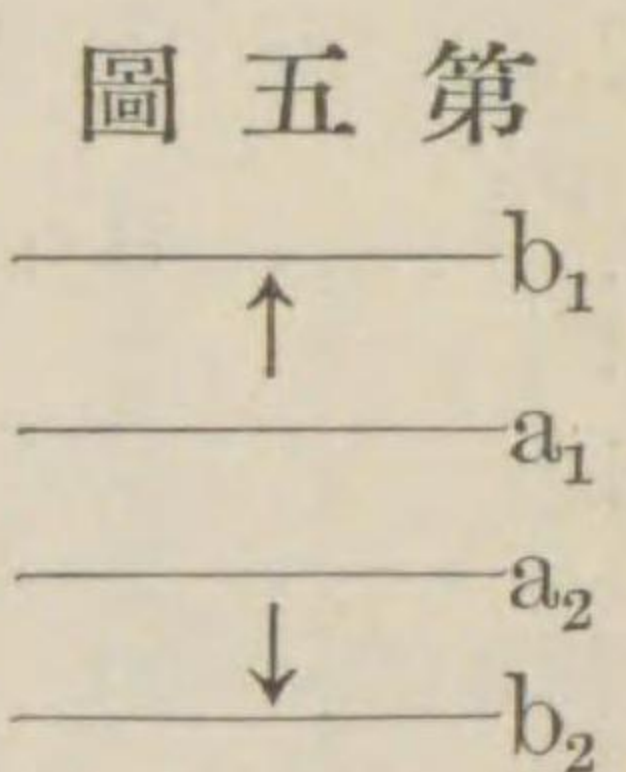
第四圖



若し、眼が運動すると、その効果は殘像にも及ぶべき筈であるが、然し殘像が静止してゐても運動が感ぜられる。これ、眼の運動が、運動視を直接に規定しない第二の證左である。

(三) 同時に反對運動が感ぜられる場合を實驗的に示すことが困難でない。





第五圖 例へば、 $a_1$ 、 $a_2$ を、第一に露出し、次に、 $b_1$ 、 $b_2$ を露出すると二つの反対方向の運動が、同時に出現する、これ眼の運動が、運動視を直接に規定し得ない第三の證左である。

眼の運動が、否定せられる様に、近隣の残像が、重り合つて構成的に運動現象が發生すると考へる考へ方は、困難がある、例へば近隣の二つの刺戟だけに運動があつて、少しく距つた場合に、全然運動が起り得ないとすると、多少問題があるが一定の制限内では、可なりの距りが、尙ほ且つ、著しい運動を伴ふものである。

注意作用に依つて、これを説明しようとする考へ方の如きも、時に、困難を伴ふものであるが、殊に  $a$  及び  $b$  を、繼起的に露出する場合、可なり遠方に注意を向けても、尙ほ、且つ、著しい運動が、經驗せられる點は一つの謎でなければならぬ。

形態質乃至、複合質に就ての考想は、如上の現象に就て、興味ある方面を示すものであつて、恐らく、これに類似する現象と見られるのであるが、然し、この概念をもつて、直ちに、運動視現象を説明し盡さうとすることは、危険を伴ふものであると見なければならぬ、蓋し、形態質若しくは、複合質は二つの基底の所與の上に、基礎づけ

られたる新性質を示す概念であるからである、然るに實驗的内省の示す所によれば、運動的經驗に於ては、必ずしも何時も、二つの基底の存在を保證し得ぬからである、むしろ體驗としては、統一的の運動的經驗が與へられ、時に、部分運動の如き場合に、限つて二つの基底の暗示が著しく表現せられるにすぎないのである。

かくて、ウエルトハイマーは、その結果として次の點を指摘するに至つてゐる。

(一) 二つの視覚刺戟が、繼起時に一定の間隔時間と、露出時間とで、出現すると、統一的運動經驗が、精神的に何物にも、媒介せられないで、あらはれる、この經驗は  $a$  でもなければ  $b$  でもない、 $a$   $\phi$   $b$  である。

(二)  $\phi$  現象の現象的内容は、客觀的に存在しない空間的時間的間隔位置を、主觀的に補充されたものとして與へられる。

かうして、彼は、運動視に統覺、意志、注意等の心的作用の媒介を、全然否定しようとした。

ウエルトハイマーの當時の考想は、すでに、その條件的現象的研究に於て、形態質的思想から一步離脱しようとする抱芽を示さうとしたものであるが、然し尙ほ全



然、それから立場を異にして徹底的に、これを示すには、時代的背景が許してゐなかつた観が著しい、この點は、殊に、彼のとらうとした生理的考想の上に反映してゐると見るべきであらう。

## 第二、形態視の問題

先きにも論じた様に、運動視現象は、結局、形態知覺に關係するものであつて、精神的に、何等他の物の媒介を経ないで、直接に經驗せらるゝものが、 $a$ でもなければ $b$ でもなく、實に $a$ の $b$ であるかと考へるのは、その思想の表現である。

$\phi$ 現象は、純粹なる動的運動的性質を持つものであつて、二つの始發點、終末點の間に於ける間隔位置の空間的、時間的連續であるといふよりも、むしろ印象的全體運動に外ならないものである。試みに、空間的、時間的位置が確立せられる様な場合に就て考へて見ると、多くの場合、運動印象が薄弱であるか若くは、消失するやうである。

ウエルトハイマーは、如上の研究から、從來の結果を統一し、而して將來の實驗的研究に資するの目的をもつて、 $a$ の $b$ の經驗の生理的相關者に關する假説を、提示

するに至つた。

これ、有名なるウエルトハイマーの生理的假説であるが、後の形態心理學的考想への先驅的思想として發達の一段階を示すものと見ることが出来るものである。便宜上この假説を二部分に分つて見よう。

### 一、周回運動效果の假説 (Hypothese der Umkreisbewegung)

刺戟が刺戟領域から神経生理野に來る場合、その效果は、只に、一點だけに限られない、必ず、その周圍に波紋状の效果を持つものであるといふ考想である。

### 二、短輪道假説 (Hypothese des Kurzschlusses)

神経生理野に於ける周回運動效果間には中樞的生理過程としての交叉過程 (Querfunktion, cross-function) が存在してゝ、短輪道を作るものである。

この交叉過程こそ、 $\phi$ 現象の生理的相關者であるかと考へるのである。今、繼起的に刺戟が來て、 $a$ と $b$ との間隔時間が長くなると、 $b$ が來たときに $a$ の周回效果は既に消滅に近づかうとし、こゝに繼起時期への傾向を示し、間隔時間が短くなつて、 $a$ の周回運動效果が、 $b$ が來た時に、その頂點にある時には、興奮の移行



が行はれ、こゝに運動時期を呈し、若しaの周回効果が頂點に達しないのに、bの周回運動が來ると、同時時期が発生すると見るのである。

さて、ウエルトハイマーの如上の假説は一面から見ると、エーレンフェルス以來の形態質の考想到實驗的理論的根據を與へたものであつて、或は、この外に、空間水準の理論的考想、乃至は、知覺に於ける「身構へ等に就て、新視點を示してゐるが、然し他面から見ると、特にこの生理的考想の中に於ては、尙ほ考慮せらるべき問題を多分に包含するものと思ふ、蓋し、既にウエルトハイマーは、運動視の條件的現象的研究に於て、その中心思想は形態質の考想から離脱して、所謂下から上への方向の下に新性質を示すものとする考へ方に、更に一回轉を志すべき必要のあることを實驗的に指示しながら、一度、その生理的假説の立場に立つと、結局、要素的基底の所與を豫想するが如く解釋せらるべき契機を残す破目に陥つてゐることは特に目立つのである、例へばa及びbの周回運動を基礎として、この上に、更に短輪道、交叉過程等の考想をもつて説かうとすることは、外見、正確なる思想であるとしても、尙ほ考へ直さるべき問題を包含するものと見なければならぬ。

註、「ウエルトハイマーの後の諸勞作から見ると、少くとも如上の考想の中には不一致が認められる、私は在獨中、屢々、如上の點において、恩師ウエルトハイマー教授と、その意見を異にし、少くとも、その表現の仕方に於て誤解を生むべき契機の存する點を論じ、教を乞ふたのであるが、この假説は現象的性質と、當時の生理的研究の事實とを基礎として現象の下に存する生理的假説としての考想の輪廓であつて、やゝもすると陥り勝ちである様な説明的原理として、これを解釋してはならぬやうである、否、却つて將來の研究に於て檢證せらるべき性質をもつものである、蓋し、現象的性質に相應して、その形態的性質に應じて生理的機能全體が考へられ、従つて生理的機能組織の分節過程がこゝに考へらるべき唯一の假説であるから、若し、さう考へることによつて諸他の現象的機能の性質がこれに矛盾することがあれば、當然廢棄さるべき運命を持つものである、然し、若し、諸他の現象的機能の性質が、かゝる假説に少くとも一致するものであるならば、かゝる假説の精神が將來の研究の指針として示唆する點も少くないであらう。

かういふ立場から見て、果してこの最初の表現が充分であるか、否か、私は少くとも、尙ほ改更さるべき幾多の部分を持つものであると認めざるを得ないものである、ペーターマン (Petermann) などが、既に千八百九拾四年に於けるエックスナー (Exner) の考想の中に、ウエルトハイマーの思想と同じ様なものが存すると批評するが如きは全く心理學的研究の精神を理解し得ぬ素人の誤解であるとしても、兎も角、私は形態説の初期の勞作たるを失はぬと思ふものである、蓋し、當時、ウエルトハイマーは現象的機能の考想に於て形態質から離脱しようとする方向を示しながら生理的表現に於て、高々、形態質を基礎づけるに終つたが如き觀を呈してゐるからである』



ウエルトハイマーの自然民族の思考に關する研究は、自然民族に於ける思考形態を論究したものであつて、この研究を見ると、彼の後の研究に對する方向が、純然的成分に比較的妨げられないで、表現してゐると見るべきであらう。

即ち、彼は自然民族の思考に於て、如何に、形式配列組織が優つてゐるかを、考察し、自然群の發生存在を指摘したのである。

ラツアルス (Lazarus) シュタインタール (Steinthal) の研究に抱芽を持ち、ヴント (Wundt) に組織せられ、具體的問題に、その研究の歩を向けながら、遂に抽象的圖式論に終らうとしたところの民族心理學的研究が、再び具體的問題の具體的取扱ひを、要求しようとした時代に際し、ウエルトハイマーが示した理論的考案が一つの著しい示唆として働きかけてゐることは否定出來ない。

牧人が羊の群を一疋、一疋、數へないで、而も一疋失はれると、直ちに、これを知るが如き場合に於て、羊の群の組織が、むしろ、重要な意味を持つものであるが、自然民族に於ては對は一プラス一に基礎を持つものではなくて、左右相稱に基づく對形態と考ふべきものであつて、二つの眼、二つの靴、二本の木、生物的關係、夫婦等、凡て

みなこの關係に立つものである。だから時折、近くの二本の木と遠方にある一本の木とは三本の木ではなくて、二本と一本といふ關係をとり得るのである。同様に、一疋の犬と一疋の犬とは二疋であり、一人の人間と、一人の人間とは、二人であるが、一人の人間と一疋の犬とは、乗つてゐる人、連れてゐる人、狩人等と考へられる。

私共が八個の指環と考へ勝ちであるものは、彼等に於ては、一鎖として考へられ、 $\frac{8}{2}$  は即ち半分の鎖、 $\frac{8}{4}$  となると、 $1\frac{1}{4}$  の鎖か、若くは鎖としての性質が微弱となり、 $1\frac{1}{8}$  となると鎖ではない、一つの指環が存するのみである。勿論、この場合に於て、指環が如何に配列せられるかが重要であるが、一列に列べられた場合に於ても右に述べた様な關係が指摘せられる。

部分の意味はそれが坐すところの全體の組織の中に於て、決定せらるべきものであつて、獨立なる絶對内容としてではない。

ウエルトハイマーの思想によると、發生的に數といふものが一次的ではなくて、寧ろ自然群、集團複合が一次的である、即ち、最初、分節した全體組織が與へられ、二次的に數が發生したと見るのである。



私は今、當時の彼の思想を、一つ一つ詳しく吟味する餘裕はないが、すでに、早くから、所與を形態として見る見方をとり、こゝに分節せる全體構造を志してゐたことが知られる、即ち、彼は部分の意味を何時も、組織の中の部分として見ようとしたのである。

夏の炎天に當つて、水を欲する人に、極めて少量の水を與へたとすると、全く與へないと同じ結果になることがある様に、部分の意味は全體組織に關係して、その意義を持つものであつて、極めて少量の水が部分としての意義を採り得ない場合があるからである、然し、この同一少量の水が、他の場合には死者を復活せしむる効果を持つ場合があるかもしれない。

かう考へてくると、如上の考想の中には、心的生活の眞實相を理解する上に、重要な方面を暗示するものが多分に包含せられてゐると見なければならぬ。

かうして以上述べた二論文を中心として、徐々に、形態心理學が具體的の形を採つて表現して來たのであるが、千九百十三年頃を境として一方に於ては具體的實驗研究が續出し、コフカ (Kurt Koffka) を中心として、ホルテ (Adolf Korte) ケンケル

(Kenkel) リンデマン (Lindemann) 等は  $\alpha, \beta, \gamma, \delta$  等の運動視の分析的研究に向ひ、ウオルフガング・ケエラー (Wolfgang Köhler) は、チンパンゼー乃至兒童に關する獨創的研究をなし、ゲルブ (A. Gelb) ヨーランド・スタイン (Kurt Goldstein) フックス (Fuchs) 等は半盲視現象の研究から出發し、一步、一步、建設に向ひ、後年、各種の方面に新しき殿堂を作るべき契機をなしたと共に、他面に於ては、傳統心理學の破壊を志し、到る處、銳利なる論陣を張り、こゝに心理學の革命を遂げようとし、科學としての心理學に忠實である限り、直接、間接、影響せられざるものがないといふ氣運を導くに至つたのである、然らば、形態心理學は如何なる論據の下に如何なる學説を立てるか、如何なる意味に於て傳統心理學に攻撃の矢を向けるか、そして、又、かゝる心理學の精神を如何に見るべきであるか、これに就ては筆を改めて形態心理學において論ずることとすべきであらう。

### 参考書目

- (1) Max Wertheimer: Experimentelle Studien über das Sehen von Bewegung  
 (1) " " : Über das Denken der Naturvölker,  
 (I) & (II): Zeitschrift f. Psychologie 60. & 61. (1911) od. Max. Wertheimer: Drei Abhandlungen zur



## Gestalttheorie 1925.

- (三) 著者報告(第一回日本心理學大會) 一部報告
- (四) 同 (第二回日本心理學大會一部報告、一部未發表)
- (五) Exner: Über das Sehen von Bewegungen, wiener Sitz-Ber. 72, Abt. 3 1875
- (六) Marbe: Theorie der kinematogr. Projektion 1910. S. 66. S.61
- (七) Schumann: II. Kongress f. experimentelle Psychologie 1907. (Bericht)
- (八) Aubert: Die Bewegungsempfindung, Pflügers archiv. 39. 40.
- (九) Exner: Entwurf zu einer Physiologischen Erklärung der Psychischen Erscheinungen
- (九) Stern: Psychologie der Veränderungsauffassung 1906
- (一〇) W. Wundt: Physiologische Psychologie II 578—580
- (一〇) Witasek: Psychologie der Raumwahrnehmung des Auges 1910
- (一一) Marbe, zeitschrift f. Psychologie 46. S. 345. Bd. 47. S. 321.
- (一一) W. Wundt: Physiol. psychologie II S. 577.
- (一二) Ehrenfels; über Gestaltqualitäten, Vierteljahrsschrift f. wissenschaft. Philosophie XIV.  
(Das Primalgesetz 1922)
- (一三) Cornelius, Über Verschmierung und Analyse,
- (一三) Witasek, Psychologie der Raumwahrnehmung des Auges 1910

- (一四) Adolf Korte, Kinematoskopische Untersuchungen, Zeitschrift f. Psychologie Bd. 72. 1915.
- (一五) 著者報告(日本心理學大會第一回) 一部報告)
- (一六) Linke, Psychol. Stud 3. S. 545
- (一七) Erdmann—Dodge, Psychologische Untersuchungen über das Lesen, Halle 1898 S. 116 ff.
- (一七) Dodge: Eine exp. Studie der Visuellen Fixation, Zeitschrift f. Psychologie 52. I. s. 335 1909
- (一八) Bruno Petermann, Gestalttheorie und Gestaltprobleme 1929. S. 17.



## 結論

最近心理學は、こゝに、三段の展開をなさうとしてゐる。第一は、舊心理學の傳統の殻に隠れて、徐々に、これをもつて、心的生活を説き得ざることを知るに至つたことであり、第二は、形態質、基底上内容、複合質等の新概念の發生であり、第三は、下から上への心理學から離脱し、こゝに分節せる全體構造としての形態、若くは、組織、構造等の著しい擡頭である。

ヴェント心理學が誘導する結論、乃至は、ヴェツブルグ學派の飯決、機能心理學乃至、行動心理學の出現は、第一の方面に於ける考想の表現とも見られ、形態質、乃至、これに類以する思想の表現は、暗黙の間に、舊概念を豫想するの領域に芽生へ、内容心理學的考想の至るべき結論である。

第三の組織觀の心理學的思想も、各種の色彩をもつて表現してゐるが、抽象的目的觀に坐する思想から離脱するか、若しくは、これを認めるかに、よつて異つた形式が考へられる。

精神科學派の心理學、精神分析學諸派、シュテルンの人格的心理學、ドリーシユ(Driesch)の生氣論的心理學は、悉く、抽象的目的觀を、その著しい特質として持つものであるが、ライプチヒ學派、乃至、形態心理學に於ては、これに觸れようとしなない、特にこれ等の二派が、比較的、科學としての心理學の領域を保持しながら進まうとしてゐるのであるが、就中、前者に於ては、内容心理學としての色彩が濃厚であつて、徐々にこれから離脱しようとする方向を辿り、後者に於ては、一步進んでこれを止揚したる世界を志してゐるものである。

この意味に於て、最近心理學の一つの著しい方向は、内容心理學から構造心理學へ向はうとしてゐるともいはれる、こゝに機能心理學、乃至、行動心理學が、再び新たな視點から見直さるべき意味を持つとも考へられるであらう。

かういふ見方から見ると、形態心理學の問題は、實に最近心理學を貫く一つの大きな問題であつて、これを明かにすることは、やがて心理學、その物を解明すること



であるが却つて、これは別個の著書として取扱ふことが、より適切であらう。蓋し、この心理學的體系はともすると人々が豫想し勝ちであるよりも、より廣汎、且つ深遠であつて、從來これについて紹介、説述、批評せられたものの多くが、やゝもすると生硬、誤解を含み、皮相的解釋のよくこれを明かにし得ない性質のものであるからである。著書の如き懈怠、且つ、不敏なるもの、又もとより、これを企て及ぶべきでないが、若し閑日月どもあらば、或は捨石を投げることもあらう。かういふ様に考へながら、ひとまづ、筆を擱くこととしよう。

### 最近心理學十一講 終



M

Messer, A.....38, 52, 58, 64  
 Marty, A.....44  
 索引 Müller, G. E.....  
 52, 58, 60, 64, 72, 90, 98, 99, 113  
 引 Marbe, K.....52, 53, 63, 206  
 目的表象(Zielvorstellung).....55  
 無心像的思考.....61  
 マソキズム(Masochism).....136  
 命題其物(Satz an sich).....194  
 Mach, E.....16, 19, 20-21, 26, 28,  
 29, 34, 38, 104, 105, 124, 180, 202  
 Meinong, A, V.....5, 14,  
 23, 28, 31, 32, 44, 46, 103, 194, 202  
 目的解義(Zweckdeutung).....169  
 目的組織(Zwecksystem).....160  
 目的活動(Zeekwirken).....159  
 物(Die Sache).....158  
 Müller, J.....80  
 Martin, L, J.....81  
 物其自體(Ding an sich).....16

N

二次的形態質.....32  
 二個部分運動.....211  
 Natorp, P.....193  
 内向化と外向化.....161-162

O

四 オクターブ配列の法則.....91-92

P

Prince, M.....132  
 Petermann.....219

Plato.....9, 34

R

了解心理學.....121  
 Rubin, E.....78, 79, 98  
 流動現象(Fluxionserscheinungen)  
 .....84-85

劣位表象(Inferiora Vorstellung).....46  
 聯想診斷法.....139-142

S

心的構造.....111  
 Sander, F.....113  
 Spranger, E.....124-125, 130  
 精神分析學派.....132  
 サディズム(Sadism).....136  
 性的複合行爲.....136  
 創造的綜合.....24  
 算術の哲學.....29  
 志向的體驗.....41, 123  
 Spearman, C.....41  
 Selz, O.....52, 67

集合的把握.....74  
 集合素質.....75, 76  
 Stumpf, C.....4, 37, 38, 44, 178-200  
 色彩の表現形式.....93-97  
 色彩恒常性.....93-95  
 灼熱色.....96  
 心理學的快樂說.....149  
 精神分析方法.....139  
 Stern, W.....112, 157-177  
 眞理其自體.....194  
 Schumann.....206  
 周回運動效果の假説.....217  
 象徴解義.....169

總體(Inbegriff).....188-189, 196  
 攝容(Introzeption).....160  
 Schelling.....166  
 志向(意向)(Intention).....60  
 說明心理學.....121

T

對象の志向的又は精神的內在.....41  
 Twardowski, K.....44  
 單獨運動.....212  
 短輪道假説.....217  
 多樣的統一.....159  
 特殊性.....159  
 對象論.....14, 44, 195  
 透明色.....95  
 體驗全體性.....109-110  
 體質型.....82-83  
 T型.....83

U

運動視現象.....12, 204  
 Urbantschitsch.....80

V

Volkelt, H.....113  
 Vierkant.....125

W

Waitz.....37  
 Würzburg 學派.....59-69, 72  
 Watt, H. J.....52  
 Wundt, W.....3, 23, 24,  
 52, 107, 108, 114, 180, 207, 220  
 Die Wienerschule.....142  
 Weber, E. H.....3, 50  
 Watson, J. B.....5  
 Witasck, S.....4, 45  
 Wertheimer, M.....12-14, 68, 178,  
 203, 204, 208, 210, 211-213, 215-221  
 Wirth, W.....107

Y

容積色(空間色).....95  
 優位表象(Superiora-vorstellung).....46  
 欲求.....140  
 抑壓.....137

Z

圖形と地面.....98  
 座標配列説.....67  
 殘像.....80, 89  
 Zurich-Schule.....140



複合(Komplex,)	137, 144
複合(Komplex. complex)	137, 144
Frend, S.	135-143, 148
Fuchs	223
<b>G</b>	
グラーツ學派(DieGraz-schule)	31-48, 195
Goldstein, K.	223
Gelb, A.	39, 178, 223
Galton, F.	173
凝集要因(粘着要因 Die Kohärenzfa- ktoren)	74
限定(決定)の聯合的等價(Das assoz- iative Äquivalent der Determin- ierung)	57
合意味的組成(Sinngemäße Kompo- sition)	84, 86
限定の意識性	55
願望實現説	141, 149
<b>H</b>	
表象像	80, 89
反覆感覺(Repeated sensation, Wi- ederholungsempfindung)	81
反應型	83-84
Husserl, E.	4, 29, 44, 112, 123, 192-193, 202
Hillebrand 氏明度決定法	92
Hermann	91
Hering, E.	92-93
表面色	95, 96
半法則性(Halben Gesetzlichkeit)	152
Helmholtz	178

索引

Hornbostel, v.	178
非時間的形態質	27
Hartmann, E. v.	166
汎性欲説	136-137, 148-149
Hillebrand, F.	44
反射色	96
發達心理學	106-107
人(Die person)	157-158
表象其自體(Vorstellung an sich)	189, 194
變調性(被轉置性 Transponierbar- keit)	28
Herbart	36, 42, 138
Höfler, A.	39
表象力學説	36
表象産出	45
<b>I</b>	
意識態(意識層)	53
意識性	54
意味の意識性	55
一次的形態質	32
因果性	159
Ipsen, G.	113
<b>J</b>	
Jaensch, E. R.	78-93, 98
Jaensch, W.	82
James, W.	105
純音の母音性	91
時間的形態質	27
Janet, P.	132, 135, 136, 143
自己色情(Auto-erotism)	136
自己讚美(Narcissism)	136
Jung, C. G.	140

人格學(Personalistik)	157
上部意識(Das Überbewußtsein)	166-167
實體概念	17
敘述的分解心理學	120
上表面色	95, 96
實體性	159
<b>K</b>	
形態質(Die Gestaltqualitäten)	14, 26, 103, 108, 202
Kant, L.	16
Katz, D.	78, 79, 93, 95
Kroh, G.	81
Koenig	91
Kirchhoff	104
Krueger, F.	106-110
形態心理學	2, 10, 31
Koffka, K.	39, 52, 68, 90, 178, 222
Külpe, O.	50-51, 180
傾向の意識性	55
關係表象(Bezugsvorstellung)	55
決定的傾向(Die determinierende Tendenz)	58, 61
考想(Die Gedanke)	60
規則の意識	60
關係の意識	60
固執傾向(Die Perseverationsten- denz)	59, 73
形態説	73
Koehler, W.	73, 91, 178, 179, 223
形成範圍(Formative Zone)	75
Korte, A.	209, 222
交叉過程(Querfunktion, cross-fu- nction)	217

Kénkel	223
記憶殘像	80
氣質型	83
下部意識(Das Unterbewußtsein)	166
機能心理學(Die Funktionspsycho- logie)	181
解義(Deutung)	168-169
個體性(Die Individualität)	159
Koehler, F.	124
基底上徵表	103
光輝	96
關係の意識性	55
Külpe-schule	68
記憶色	95
核複合(Kern-Komplex)	137
個體心理學(派)(Die Individual-Ps- ychologische-schule)	142-148
基底上内容	32, 103
Kreibig, J. K.	32, 34
高次的形態質	33
感覺の分析	16
<b>L</b>	
Linke	210
Lazarus	220
Lindemann	223
Locke, J.	35
Leibnitz	35
Lipps, Th.	35, 179, 193
Libido	137
Lametrie	143
Lewin, K.	152, 178
Leipzig-schule	107, 114

索引

三



索引

Chalcot .....135

D

Driesch ..... 112, 130, 156  
 思性的拮抗(Männliche Protest) .....  
 .....144-145  
 Dodge .....213  
 Dilthy, W.....112, 119-130, 202

E

Ebbinghaus.....37-38, 51, 108, 202  
 Erdmann .....213  
 Exner .....206, 219  
 エレクタラ複合(Electra-complex) ...  
 .....137  
 エディプス(Oedipus).....137  
 Ehrenfels, C.....14, 26,  
 27-29, 32-36, 38, 103, 124, 202, 218  
 Eidetik .....81  
 Eidetische Anlage.....81  
 Eidetiker.....81  
 エンメルト法則(Das Emmertsche  
 Gesetz).....81

F

Fechner, G. T.....3, 50, 80  
 複合質(Die Komplexqualitäten).....  
 .....106, 108-117  
 複合質學說(Die Theorie der Kom-  
 plexqualitäten).....109  
 複合説(Die Komplextheorie).....  
 .....67, 73-77

索引

A

Ach, N. .... 52, 54-58, 64  
 Aubert .....206  
 Adler, A.....142-144, 149  
 Argelander, A.....67  
 Allesch, v,.....97  
 Angell, J. R. .... 5  
 Avenarius, R. .... 18-21, 104, 105  
 Aquino, T. v.....194  
 Aristoteles, ..... 9, 34  
 明るい色 ..... 196  
 愛他的性的衝動 ..... 136

B

Binet, A. .... 81, 173  
 B型.....83  
 Brentano, F. ...4, 14, 40-44, 91, 123,  
 178, 192-193  
 Bühler, C,.....66  
 Breuer .....136  
 Bolzano, B.....187, 194  
 Bühler, K.....52, 58, 60, 64-66, 97  
 Benussi, V. ....39, 40, 46, 47

C

智的機能論.....32  
 Condillac(コンデイヤク) .....143  
 Cornelius, H....103-105, 107,109-110,  
 114  
 直観像學說(Die Lehre von den Ans-  
 chauungsbildern) .....79-80

昭和五年六月二十八日印刷  
 昭和五年七月一日發行

定價金貳圓五拾錢



發行所

東京市神田區  
 錦町三丁目

培

風

館

振替東京三二六一七  
 電話神田三七七四

著者 小野 島 右 左 雄

發行者 山 本 慶 治

印刷者 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地  
 新 井 長 治 郎

印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地  
 株式會社 秀 英 舍

最近心理學二十講附







612  
21



